

軸に」を参照されたい。

- (5) 赤毛犬「とち蔵」の転生騒動については以下を参照。拙稿『犬の伊勢参りと転生』『日本文学研究誌』第七輯、大東文化大学日本文学専攻、二〇〇九年。

- (6) 一九八〇年代以降、長野県の赤穂高校、川崎市の法政第二高校それぞれの「平和ゼミナール」によって登戸研究所関係者への聞き取り調査が行われ、のちに元研究員の伴繁雄による『陸軍登戸研究所の真実』出版に繋がった（芙蓉書房、二〇一〇年）。詳細は以下を参照。『明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック』（明治大学平和教育登戸研究所資料館ブックレット）。

- (7) 『定本柳田國男集』第十卷、筑摩書房、一九六九年。

- (8) 小松和彦『妖怪文化入門』角川書店、二〇一二年（せりか書房、二〇〇六年初出）。

- (9) 東アジア怪異学会『怪異学入門』岩田書院、二〇一二年。

- (10) 飯倉義之「妖怪のリアリティを生きる―複数のリアリティに（憑かれる）研究の可能性―」『現代民俗学研究』第七号、現代民俗学会、二〇一五年三月。

（いまい・ひでかず／国際日本文化研究センター）

【第六九回研究例会（怪異の聞き方・書き取り方―口承研究の視点から）

怪談を束ねる

―明治後期の新聞連載記事を中心に

一柳 廣孝

はじめに

明治期に新たな言説の場として発展しつつあった新聞メディアは、明治三十年代半ばになると積極的に怪談を取り上げ始めた。長らく幽霊や妖怪は前時代の迷信の象徴として排斥の対象とされてきたが、かといつて怪異に関する話題が消え去った訳ではない。巷で語られるトピックとして、読者は怪異を扱った記事に関心を抱き続けていたようだ^①。恐らくそこには、上から押し付けられた「文明開化」に対する庶民の違和感も反映していただろう。

ただこれらの怪異は、あくまで新しい世になってもなお残滓をとどめている迷信の現われとして処理されてきた。ではなぜ、新聞メディアは怪異に関する記事を掲載し続けたのか。庶民への啓蒙のためか。それとも彼らの怪異に対する尽きせぬ興味を満たすためだったのか。ならば怪異は、新たな価値観に身を包んだ知識

人と巷の人々との鬭争の場だったとも言える。当初、圧倒的に優位だった合理主義的解釈にカウンターの視点が提示され始めるのが、明治三十年代半ばである。そして、この変化がもつとも明瞭な形で新聞紙上に投影されたのが、怪談の連載だった。

怪談の連載とは、ある指向性にしたがって多数の怪談を配置する行為である。新聞メディアの読者戦略は、怪談を束ねるためにいかなる枠組みを設定するか、という点に顕著に現われる。そしてその枠組みは、同時代の読者の関心のありようと連動している。本稿では、明治後期に各種新聞に登場する連載怪談に注目し、新聞メディアの編集方針やその特徴などを検討することで、同時代の怪談をめぐる言説空間のありようについて考えてみたい。

1 明治の新聞メディアにおける怪異の位置

怪異を「迷信」と否定する解釈枠の揺らぎは、例えば茫茫生「怪談女の泣声」(明治35・06・27、台湾民報)の論理構成から垣間見ることができる。同記事は「怪力乱神を語らずとは昔し孔子様の言われたことで、心の正しい智慧分別の明かなものに幽霊や化物の眼に映るべき筈はなく、斯るものがあると云うは、得てして智慧の暗い迷信の深い者に多く、其証拠には世の開けぬ昔時むかしに限りて幽霊や化物の話しありて、開けゆく今の世には頓と其様な話しも聞かぬというものだ」と儒教における怪異の扱い方を示しつつ、「迷信」というフレームによっていったん怪異を否定する。

だが「世の中には理外の理とか云うものもありて、一概に道理ばかりでも推通されぬことあり、之を哲学的に八ケましくいうと、超理的現象とか何とか云うそつだ」と、従来の「道理」では処理できない現象の存在を強調し、「超理的現象」という耳慣れない哲学用語を用いてリアリティを補填しようとする。

同様のパターンは「狸が怨霊 化物屋敷 上の巻」(明治36・03・21、伊勢新聞)にも見いだせる。同記事は「封建の昔ならイザ知らず、二十世紀の今日怪談など馬鹿気た事と笑う人もあらんか」と言いつつも「されど妖怪学に名高き円了博士さえ、嘗て怨霊の祟りに焼けし家の事実を見て跣足はだしで逃げし事ありとか云えば其の実なしとも断言しがたし」と、わざわざ井上円了の名を挙げ、怪異の現実性を強調する。

円了の名前は、他の怪異関連記事にもしばしば登場している。例えば「怪しの物語 はしがき」(明治37・01・14、九州日報)には「幽霊や妖怪や変化の怪しものは即ち井上円了博士の説の如く又一般実験心理学者の論の如く単に人間の神経作用の惹起したる幻影であるかも知れぬ、或は米国の実験宗教哲学者の泰斗ジエームス博士の説の様に實際靈魂不滅の為めかも知れぬ、兎に角其が如何なる神経作用にもせよ、何故にこういふ風に昔から怪しの物語が沢山あることであらうか」とある。

この言説が興味深いのは、怪異を「人間の神経作用の惹起したる幻影」とする仮説と「靈魂不滅」説を並立させるとともに、前者の代表として円了と「一般実験心理学者」を挙げ、後者の代表

としてウイリアム・ジェームズを挙げている点である。前者は啓蒙主義の下で、妖怪や幽霊を全否定した代表的な言説の提供者と言える。例えば井上円了『妖怪叢書第四編 迷信解』（明治37・09、哲学書院）には「真に幽霊とすべきものを考ふるに、つまり人の精神作用より起るものと見て宜い、言葉を変えて申さば、幽霊に就きて吾人の有する記憶觀念が其形を現して、他人の靈魂の實在を見るように思うのである、例えば母親が愛児を失い、毎日毎夜之を心頭に浮べて忘ることなきときは、其姿が自然に眼に触れ、夢の如くに見ることがある、然るときは母親は必ず亡児の幽霊を見たりというに違いない、されど其幽霊は心中の妄想が其形を現じたるまでである、すべて世間の幽霊はみな此様なものなれば、己れの心の反射幻影というて差支ない」とある。

円了の言説が啓蒙主義の影響下にあつて怪異を扱う際の代表的な解釈だったとすれば、先の「怪しの物語 はしがき」は、その解釈に対する疑念を表明していることになる。「理外の理」の存在を強調し、怪異の實在をアピールすることで「幻影」説の相対化を図った境界的な言説として「怪しの物語 はしがき」の言説を位置づけることができそうだ。そして、円了に代わる新たな枠組みとして盛んに紹介され始めるのが、欧米の心霊学にもとづく解釈枠であり、その代表として言揚げされたのがウイリアム・ジェームズだった。

当時の日本には、欧米心霊研究への強い関心が存在していた。その結実のひとつが、平井金三と松村介石による心霊的現象研

究会の発足である。「幽霊研究会起る」（明治41・05・28、佐賀新聞）は、同研究会を次のように紹介している。「過日東京本郷区志岐坂上宮学院に於て外国語学教授平井金三氏及び松村介石氏の發起にて心霊的現象研究会なるものを開会したる」「軌近物質的科學の進歩は実に驚くべく従て宇宙万般の事物は悉く物質科學によりて解釈し其解釈を下す能わざるものは荒誕無稽として一概に排斥致します、けれども世に不思議と称せらるる現象は古より今に至る迄往々人の実験する所で」「今や欧米の科學者は大いに此方面に心を傾注し心霊的現象研究会を開いて只管研究に余念なき有様です」。

右の引用の発話部分は、平井によるものである。平井の主張は、様々な新聞メディアで紹介された。「学者の幽霊談 注目すべき思想界の現象」（明治41・06・01、「二六新聞」）には「世に不思議と云われ奇蹟と云わるる事柄を研究する会が欧米には出来て居ります斯様な次第ですから幽霊がない杯とは決して云われませぬ」とある。彼の談話は「幽霊研究（幽霊研究会発起者平井金三氏談）」（明治41・06・05、京都日出新聞）、「学者の幽霊談 幽霊研究会発起者の談話 注目すべき思想界の現象」（明治41・06・05、九州日日新聞）、「学者の幽霊談」（明治41・07・30、愛媛新報）、「幽霊はあるかも知れぬ 平井金三氏の談」（明治42・04・28、九州日報）など、複数の新聞メディアに転載された。

欧米の心霊研究の動向を踏まえた平井の発言は、よりストレートに欧米の研究状況を紹介する新聞記事に繋がる。「魂魄の存在、

重量、実質、容積等を決定せんために欧米諸国では種々の研究調査が行われて居るが就中、仏国の博士バラックと云う人は多年研究の結果霊魂を写真に取つたと云つて居る(「人間の魂魄」明治41・07・19、九州日報)、「我が国にても近頃一派学者の間に幽霊研究会なるものが起り幽霊の有無が八釜しく議論されつつあるが国民新聞の所報によれば極めて最近の事英国にても幽霊は確かに在り現に幽霊の目方と色模様さえも知り得ると公言し其の研究の結果を英国芸術家協会に堂々と述べ立てたる一学者あり此人は名をフォーニエル、ダルベと云いてダブリン心理研究会長たり」(「幽霊は確に在る」、明治42・01・17、新愛知)などは、その一例である。

こうした新聞紙上における言説編成は、霊魂をめぐる新たな議論の場を生み出した。「寸楽亭の化物会」(明治42・07・21、名古屋新聞)には「小松周海氏の死霊生霊感応の記事が出てから其処此所に怪談や幽霊話が熾んになって、同志二三が集合^{よりあ}と話しは何時も霊魂の事で持ちきつて大変な議論が起る」とあるが、ここで言う「小松周海氏の死霊生霊感応の記事」とは「^{なま}霊魂と語る」(明治42・07・09)18、名古屋新聞)を指すと思われる。同記事は、愛知県幡豆郡福地村の善光寺住職、小松周海が法華経の功力によつて死霊生霊を呼び寄せると評判になり、妄りに祈禱を行つて世人を惑わせると警察署から告発されたものの、周海はこれを不服として控訴した結果、実際に霊を呼び出せるか実験が行われた、その顛末を紹介したものである。

欧米の心霊研究のフレイムが既存の宗教的、民俗的文脈にもとづく降霊会をクローズアップし、降霊の事実性を判定する規範として動き始めているのだ。ここに至つて、井上円了に代表される枠組みは後景に退き、平井らによる欧米心霊研究の枠組みが前景化する。それは、心理学や精神医学によつて記号化されつつあつた霊魂の実存的な復権であり、「科学」による幽霊の再解釈を促す動きと言える。「幽霊と云うものは意識の作用によりて現るものであつて」「相愛して居るものの或るものが或る作用を起した場合又は怨恨措く能わざる一刹那に於て起る意識的作用が其対象の或者に感応したる場合に於て空間又は其の一人の心に描出されるのが即ち幽霊である」(野波十畝^{ほな}「幽霊」(二)」、明治42・09・05、九州日報)は、こうした新しい「科学」的な仮説の一例である。同様の説は夏目漱石「琴のそら音」(明治38・06、「七人」)や水野葉舟「テレパシー」(熊田茂八編「怪談会」所収、明治42・10、柏倉書楼)でも紹介されている。幽霊IIテレパシー説である。ガーニー、ボドモア、マイヤーズ「生者の幻像」(二八八六年)を初発とするこの仮説は、SPR(英国心霊研究協会)による最も知られた研究成果のひとつとされている。

2 物語としての怪談

文明開化とともに提示された怪異に関する枠組みの否定とそ

れに代わる新たな枠組みの提示が、同時代の新聞メディアに大量の怪談記事をもたらした一因であると言つていいだろう。その背景には、いわゆる「煩悶の時代」における精神主義の台頭がある⁴。とはいえ、明治三十年代後半にはじめて新聞メディアが怪談を連載したという訳ではない。早い例としては「百物語」(明治27・01・04～02・27、やまと新聞)がある。後にこの連載は『百物語』(明治27・07、扶桑堂)にまとめられた⁵。同書の序には、次のように記されている。「決して化物あるにあらず。皆自ら、己れの臆病なる神経を以て、強て化物を作るなるべし」⁶。「果してこれ等の奇怪なる事がありしや否やの小理屈は姑く措き、この数席の談柄中、大いに善を勧め、悪を懲し、世を諷し、人を戒むるの効能は、却てかの男女の痴情を説破したるの類に優る事、幾層倍なるに感じたるが為に、皆さん、是ッ非御一読あつてしかるべし」。

このように同書は啓蒙主義の文脈に則り、怪異の事実性を否定して、その教育的効果を強調する。ただし、本書に収録されている怪談には幽霊の存在を強調する話も多い⁶。では、明治三十年代後半から見られる新聞の連載怪談からは、いかなる特徴を見いだすことができるのか。ここでは、次表に示した十四種類の連載怪談をサンプルとして、その特徴について考えてみたい。なお、以下の分析において、個々の連載怪談のタイトルは番号で示すこととする。

まずこの時期の連載怪談に特徴的なのは、それぞれの地方新

明治後期の新聞連載怪談

	タイトル	掲載時期	掲載回数	掲載紙
1	百物語	明 38・2・13～3・19	23	やまと新聞
2	古今百物語	明 40・9・14～10・3	10	紀伊毎日新聞
3	伊予百物語	明 42・7・18～9・29	59	愛媛新聞
4	涼み話	明 42・7・22～8・15	25	名古屋新聞
5	役者の怪談	明 42・8・27～10・27	50	都新聞
6	諸国珍談百話	明 42・9・25～11・20	10	十日町新聞
7	怪事奇譚	明 42・10・4～8	5	沖繩毎日新聞
8	八風の八怪	明 42・10・20～11・19	20	扶桑新聞
9	朝鮮の怪談／朝鮮奇聞	明 43・8・23～9・9	15	朝鮮新聞
10	妖怪変化秋の夜物語	明 43・10・16～31 同 11・04～12	25	九州日報
11	奇抜な怪談会	明 43・10・11～11・8	14	福岡日日新聞
12	第二回怪談会	明 43・11・9～12	4	福岡日日新聞
13	新怪談揃	明 44・6・27～7・20	14	小樽新聞
14	怪談	明 44・7・31～9・4	22	伊勢新聞

聞が、その地方に伝わる怪談を地域固有の文化として意味付けている点である。1、2、3、6、9、14が該当する。怪異を扱う場合に厄介なのは、その怪異がはたして事実か否かという判定基準をめぐって議論が紛糾する点にある。しかし、最初か

ら怪異を文化の問題としておけば、怪異の事実性を問う必要はない。怪異に対する関心が高まっているなか、理論的な問題に拘泥することなく、物語それ自体を楽しむ姿勢を強調しておけばよいのだ。

例えば1の予告には「何んのその、古しと云わば云え是れも世に伝わる一つの物語、何れの里にもそれぞれにある話を此に集めて日々掲載なさんとて、乞う其内容は次号の誌上より……只、大方の御寄贈を仰ぐ」(明治38・02・08、10)とある。当初1には「近世怪談」という角書きがあった。この角書きどおり、1は江戸時代の話を中心である。物語の舞台も、弘前、米沢、上州、神戸、浅草、栃木と広範囲に亘っており、テーマに統一性がある訳でもない。時間的にも現在から隔たった江戸時代を対象にしているように、事実性よりも物語性が重視されている。

また、地域性への関心は民俗的な視点と結びつく。月村生「昔の化物語(二)」(明治39・08・27、神戸新聞)は、次のように述べる。「僕は妖怪の話が好きで何処へ旅行しても其土地の怪談やお化の昔語りを古老に聞くを何よりの楽たのしみにして居る、怪談やお化に関する書籍は目にあれば買い求めて置くようにして居る、若し他日同好の士があつたら一の怪談倶楽部の様なものを起して古来の日本妖怪の話を研究したら面白いと思ふ」「今日の社会から見ると化物の話や妖怪の事は馬鹿らしい様なものでお笑いになる方もあるがつまらぬ話の中に其土地其時代の人情風俗人智の程度が窺い知られて其談はなしの変化に依つても人文の発

達が見えて無限の面白味があるかと思ふ」「現に此神戸にも英国から遙々渡来して八年間、只日本の妖怪談や化物の研究のみして居るゴールドスミス氏がある」。

ちなみに、この記事に登場するゴールドスミスとは、小泉八雲に比肩する日本怪談の収集家として後に注目を集めたりチャード・ゴードン・スミスのことと思われる。月村生の言説は、中央で水野葉舟、佐々木喜善、柳田国男らが結成した怪談研究会と視点を共有する人々が地方にも存在したこと、民俗学的視点にもとづく土地に根ざした怪談への関心が、ある程度共有されていたことを感知させる。

「秋の夜長のお伽談に紀州にありし古今怪談の類いを集めて連載せんとす材料の寄稿を歓迎す」(2、明治40・08・31)、「夏季の読物」の一つとして本日の紙上から「伊予百物語」を連載することとする」「我愛媛県に於ける古書の記録或は古老の口碑などに伝わつて居る不可思議な物語を集めたもので一名を「伊予妖怪録」とも称すべきものだ」(3、明治42・07・18)などは、おそろしくこうした読者へ向けての発言なのだろう。

ここでは、とりあえず事実の有無は棚上げされる。「お約束の古今百怪談は二十計り材料が集まったので、ボチボチと書き初める、シカシ有るといつて無いのは金と化け物、二十世紀の今日にお化物語も何とやらなれど、そこが秋の夜永のお伽談し、理屈に合わない処が怪談の身上にて、井上妖怪博士が真面目返つて研究をして居るなどから見てもまんざら捨てたものでもある

まい」(2、明治40・09・14)、「兎に角ここには事実の有無を論ずるのではなくて只だこんな物語も残つて居るといふことを紹介するに止まるまでである」(3、明治42・07・18)といった具合である。

このような怪談を通しての「地元」への眼差しは、故郷意識の形成と繋がっている可能性がある。日露戦争後に地方新聞が躍進したこともあり、この時期、郷土意識はいっそうの高まりを見せていた。成田龍一によれば、近代日本における「故郷」の概念は一八八〇年代をひとつの節目として組み立てられ、以後、通奏低音のごとく語られ続けるとともに、産業化と文明化のなかで拡大の一途をたどった。「故郷」は構成され、語られることで立ち現れてくる空間だが、それは生まれ育った土地から離れて暮らす人々にとって、しばしば自らのアイデンティティの核となった⁸⁾。だとすればそれぞれの土地に根ざす怪談は、故郷を想起させる指標という意味で、もはや地域遺産といつても過言ではない。

一方、特定の場所をターゲットとした怪談収集には、別の狙いが含まれることもあった。「異なりたる社会には各異なりたる風俗習慣あると共に其社会にはお伽噺の様なる固有の迷信と怪談あるは争うべからざる事実なり」とは9の冒頭だが(明治43・08・23)、韓国併合は同年八月二十九日であり、9の連載渦中のことだった。先の引用は、次のように続く。「朝鮮にも亦幾多是等のものありて中には吾人の頗る奇異に感ずる迷信や夢想たに及ばざる怪談の野乗雑記等に見ゆるもの少からず吾人の如き

見聞狭きものにて尚然りされば韓国の事情に通じ韓国を研究したる人々には歴史に其見聞多かるべしと信す」。9における当地の怪談は、地域遺産というよりも、植民地とした地域を分析するためのデータとして位置付けられている。

3 事実としての怪談

以上のような物語性を強調する連載怪談に対して、怪異の事実性を重視し、ある意味でのルポルタージュ性を売り物にするタイトルの連載も多い。4、5、10、11、12、13、14が該当する。明治四三年十月以降のものは、全てこのスタイルである。この時期に、いわゆる円了フレームから平井フレームへの移行が完了したということだろう。时期的には、千里眼事件が新聞メディアを賑わせてきた頃と重なる⁹⁾。千里眼という超常能力の存在が、怪異という非現実的な現象の実在証明と受け取られた可能性が高い。

このなかでまず注目すべきは、井上円了という名前である。彼の名前は、2、3、5、12、13に登場している。2には「理屈に合わない処が怪談の身上にて、井上妖怪博士が真面目返つて研究をして居るなどから見てもまんざら捨てたものでもありません」(明治40・09・14)、3には「井上円了博士にでも聞かせたら屈撓な研究の好資料となる」(3中「天狗の悪戯」(上)、明治42・08・19)、5には「その時分余り不思議な事というので例の井上円了博士に話して一つの問題になったとか」(5中「幽霊

の眉間を割った福島清」、明治42・09・04」とある。

これらの例は、「あの」円了が関心を示しているということでき、事実性の担保となる。また12には、次の一文がある。「幽霊に就ては妖怪学の中興の祖円了博士が研究を起して以来、宗教家や心理学者が真面目腐つて議論中である、幽霊に形の有無は矢張り議論中である、昔の人が幽霊を見るのは大抵夜中夢幻の裡であるが今の人は白昼青天の下に見る、夫れで妖怪は無い者と研究するより、有る者として目安を立てた方が面白い、催眠術と一口にいうが人間と動物と植物と鉱物の間には、常に相互いに千里眼又は催眠術の作用で感応し合つて居るから斯学の巧者な人は追付け木人語り石女舞う時節が来ると請合つて居る」(明治43・11・09)。

西欧心靈研究の重要なトピックである千里眼(透視)や催眠術を取り上げつつ、かつての非常識が常識になる日も近いと示唆する訳だが、円了を用いたこのような論理展開は、怪異をめぐる問題を探るにあたって、円了の枠組みが変質しつつあることを示している。円了の妖怪学とは、常識では判断できないような現象に対して合理的な説明を与え、それらが存在しないことを証明する学問だった。しかし同記事は、妖怪は「有る者として目安を立てた方が面白い」と述べる。これらの連載怪談にあつては、円了の名前は逆説的に怪異の事実性を保証する記号として機能しているのだ。

さて、ここであらためて「実話怪談」の内容に目を向けてみよう。4の冒頭には、次のような言説がある。「小松周海師が祈

禱の中から試みた不思議な実験談やら、又近く寸楽亭の怪談会に現れた不思議な妖怪実見談を納涼台の物語りとして今日から掲げる事にしよう」(明治42・07・22)。4の話は全て「いま、ここ」で起きた実話怪談として紹介されており、霊の存在はすでに前提となつている。喜多村緑郎が参加した、寸楽亭の怪談会で披露された話を中心である。喜多村は、泉鏡花の怪談会を主催するなど、怪談好きとしても知られていた。

また「急に秋風が吹き初め亡き魂祭の盂蘭盆会も近くなつたから怪談ばなしも興味があろうと思う」(明治42・08・27)で始まる5は、伊井蓉峰、尾上菊之助、澤村源之助、喜多村緑郎、坂東三津五郎など、歌舞伎役者や俳優からの聞き書きという体裁を取る。伝聞もあるものの、基本的には実名が明記された当人の体験談であり、ほとんどが明治以降の話である。「いま・ここ」に喚起した話という意味で、実話怪談のテイストが強い。

これらの例が出来事としての怪談を扱っているとすれば、実在の場所を焦点化した連載怪談が8である。地誌的な関心という意味では、固有の土地への眼差しと言えるし、実際に怪異がその場所で生じていることを強調しているという意味では、実話怪談と言える。物語性と事実性の要素を併せ持ちながら、特に空間的な関心が突出した記事である。江戸時代に地方を異界と見なした「北越雪譜」(一八三七〜四一年)などの系譜に近い。

8の冒頭は、次の通りである。「広い日本には不思議な処が三つある。それは能登の片波、赤城の人穴、八風の八怪などの事

で、いづれも昔から人口に膾炙されて居るが、記録として詳しいものは未だ曾て見た事がない。「殊に八風の八怪に至りては、近來口にするものもなき有様であるが、不思議玄妙の怪異は、今も昔も依然として変りなく木樵獵人の肝を寒からしむるが如き事珍しくない、然らばこの八怪なるものは何であるかと云うと、巨瀬の山蛭黒谷の天狗杉、行者が滝の黒百合、八瀬の赤藤、阪下の熊蟻、野田の女郎蜘蛛、一の平の鬼女、蛇ヶ窪の山椒魚等である」「八風とは八風峠の事で伊勢より江州へ越す間道で、昔は」「様々なる奇異の事に出会うにも拘わらず、懲り性もなく往来したそのだが、汽車が通ずる様になつてからは」「犬の子一匹通らぬ」(明治42・10・20)。

八風峠は、桑名から八日市に至る八風街道にあつて鈴鹿山脈の難所に位置する。八風街道は伊勢を經由して尾張と都を結ぶルートであり、戦国時代には織田信長らの武將や近江商人などが重用したものの、明治後期にいたつて廃れたようだ。東海道本線の新橋と神戸間が開業して、名古屋のみならず関東と関西が鉄道で繋がったのは、一八八九(明治二二)年。野村典彦は鉄道のトンネルに言及しつつ「峠を越えていた「あるく」身体を過去のものとしたトンネルは、平坦であることと直線であることを主張し、自然をねじ伏せてゆく近代の理を見せつける」と指摘しているが、忘れ去られた峠という空間は、あらためてその境界性、異界性を誇示する。

そして、このような特異な空間は、交通の要所というかつての

ニュアンスとは異なる意味で人々を惹きつける。8には「探検に就て多大の趣味を有する人々は、昨今切りに書を担当記者に寄せて八風ヶ岳の位置や地形その他に就て問合せらるる事であるが、参考の爲め茲にその略図を掲げよう。即ち此の図は參謀本部の陸地測量部で発行されたものであるから、寸分も誤りはない」という記述がある。この記事は読者に「探検」を促している。

実際に、行こうと思えば行ける異界。この記事には明治期の少年たちを熱狂させた、雑誌「冒険世界」「探検世界」などに通じる、未知なる世界への憧憬の念が存在する。鉄道網が整備されていくことで、逆に到達困難な空所の存在が強調される。八風峠は、そうした空所のひとつだった。鉄道と地図と山中他界という組み合わせは、泉鏡花「高野聖」(明治33・02、「新小説」)の世界との連動性を想起させるだろう。

4 怪談を構成する

では、こうした連載怪談は、どのように情報を収集して記事を構成していたのか。例えば4、7、11、12は、実際に行われた怪談会の模様を紙上で再現したケースである。明治三十年代から復活する百物語(怪談会)については、東雅夫の詳細な言及がある。巷で行われていた怪談会の模様は、新聞メディアでしばしば紹介されていた。例えば7の冒頭には「去年の三月確か節句の晩であつたと思う僕はS君に誘われて或る小会に落合

うた事がある席上と謝野寛、馬場胡蝶、鈴木鼓村、小栗風葉など云う文壇著名の人の面白い妖怪譚を聞く事を得た其の時の談話を其儘S君が筆記して置いたのを今も手元に蔵してある「読者幸に一読の榮を賜え」とある(明治42・10・04)。怪談会の模様を紙上で紹介するスタイルである。実はこの連載の自身は、黄雲生「不思議譚」(明治41・04、「趣味」と重なっている。すでに雑誌で紹介された内容を、地方紙で再利用している訳だ。

怪談会の状況を忠実に再現しようとする意識は、11にも見られる。「此頃秋の雨シトシトと降る晚怪談同好の士が揃いも揃って数人集ったを幸い、幹事の發議で各自最も斬新奇抜な怪談をする事となった、処は市外〇〇村の禪宗寺△△寺、住職に乞うて会員は皆百衣を着て、真暗い本堂の真中に唯蠟燭一本点けた、話しの切れ目切れ目に銅鉢を叩く事となった、又手始まり始まり」(明治43・10・11)といった表現には、音声も含めた現場の雰囲気の再現に気を配っているように思われる。

また、読者を經由して情報を収集しているケースもある。2、6、10である。2は、個人レベルでの情報収集が紙面に反映されたケースである。2の冒頭には、次のように記されている。「読者に一言申す、私が一昨年某青年雑誌に絵葉書交換の広告をした、ところが沢山の応換者が御座いまして今では約三千枚ばかりアルバムに入れてあります、其交換する時ただ交換では面白味がありませんから各地の珍談奇話でも聞きたいものだと思つて其旨を返葉に書いてやると賛成してくれまして各地の珍談奇話続々送つて

くる中々趣味がある本紙に登載したのは其中の面白いのを出した訳なのです、しかし皆な絵葉書から取つたものではありませんそれから文体は私の作です、事実だけ取つたのです」(明治42・09・25)。

2の場合は記者の個人的な営みを流用している訳だが、やがてそれは新聞社全体の企画となる。例えば10の場合、連載に先だつて「妖怪談を募る 秋の夜長物語 凄くて怖いのが最上」(明治43・10・07、九州日報)なる、募集告知記事が掲載されていた。以下、全文を引用する。

一般の読者諸君から「妖怪談」を募ります、規定左の如し
▲種類 幽霊でも狸でも狐でも生霊でも其他凄くて怖いものならば何でも構わぬ事 ▲場所 範囲を「九州全体」といたします ▲時日 古今を問いません、實際あつた事でなくては採りません ▲文章 別に文章を問いません、上手でも下手でも構わぬ、又有りの儘に書いても宜しい ▲宛所 九州日報編輯局社会部宛の事 傍に「妖怪談応募」と記入する事、又住所氏名明記の事 ▲報酬 薄謝ながら採用したものへは一篇に就て一金 三円 を贈呈いたします、ドシドシ投稿して頂き度い ▲第一回メ切 来る十日 但し地方より郵送の分は十日の日付あるものを採る

この募集の結果については「妖怪談」募集に就て(上)(明

治43・10・12、九州日報)で、次のように報告されている。「第一回募集の「妖怪談」は、愈々一昨日を以て市内の分をメ切、更に昨日午後六時を以て、地方から郵送した分をメ切ました。而して選者の手に集った通数は実に百九通の多きに達しました、新聞記者の常套手段から言えば、三百通とでも謂い度い位の盛況であります」。もしかするとこの百九という数字も誇張なのかもしれないが、近來稀に見る成功だったと自画自賛していることは疑えない。最終的にこの中から六通が採用され、10に掲載された。この試みが読者にも受け入れられたのだろう、すぐさま十月二十九日締切で第二回募集が掛けられた。このときの応募総数は百七通(10・31)、採用されたのは四編だった(11・03)。

第二回募集終了後には、怪談の書き方まで伝授している。「妖怪談」なるものは、妖怪又は怖い、凄いを主とするのだから、その原因を説くに当り、殊更に昔々しい花道は要るまいと思いません、なるべく花道を短くして、本舞台を広くする、それで読者を怖がらせるというのが、妖怪談の上乗なるものであろうと思う、彼の徒らに筆を廻して、くどくどしく書き立てるのは、全然田舎式というのであります」(第二回「妖怪談」募集に就て)、明治43・10・31、九州日報)。あたかも現代の実話怪談を思わせるような文体の教授である。怪談を書くにあたっての構成や文体への意識を喚起させるこの説明は、あらためて実話怪談も「物語」であることを認識させるだろう。

こうした読者への作品募集は、新聞メディアにとどまらず他

メディアでも行われていた。その結果、問題も生じる。例えば、盗作である。第二回当選作のうち「南無阿弥陀仏」は「本年九月七日発行の「大阪化粧品商報」第二百二十九号に懸賞募集当選として掲載せられたる妖怪談「南無阿弥陀仏」を其儘に書き抜き本社の募集に応じたものと判明す故に選者は之を公徳に訴え規定の賞金を贈呈せざる事とせり」(明治43・11・13、九州日報)。ただしこの報道は、盗作が成立するぐらい怪談を掲載する活字媒体が増加していたことを示している。怪談業界は、大いに活性化していたのである。

おわりに

明治後期の新聞メディアにおける連載怪談は、雑誌での特集や盛んに行われていた怪談会とリンクしつつ、読者をも巻き込んで新たな「怪談」の言説圏を形成していた。例えば「新公論」妖怪特集号(26年04号、明治44・04)は、新聞連載の好評が雑誌の誌面構成に影響を与えた可能性がある。同特集における「怪談妖話」の前半は実話怪談的な色彩が強く、後半は「諸国化物談」「地方怪談」とタイトルが附せられているように、ローカル性を強調する。末尾に「(此外集つまった三十二篇の地方怪談紙数の都合で割愛)」とあるので、これらの話は一般公募で収集されたのだろう。新聞に連載された怪談に見られる実話性、地方性(伝承、伝説への関心を含む)といった特徴が、このコーナ―

ではそのまま踏襲されている。

また「怪談百物語」（『新小説』、明治44・12）では、奥付に「投稿及写真募集 各地に於る隠れたる史蹟、伝説、神話、怪談の類、名物及名勝に就ての興味ある記事。それらに関する写真を募集す、選択の上誌上に掲載せるものには相当の報酬を呈すべし／＼右、原稿は十行二十字詰傍訓付、書体明楷、新小説編輯局宛、投稿者の宿所氏名を明記すべし／＼寄送者に如何なる事情ありとも一度領収したる原稿は返却せず」とある。ここからは、「新公論」妖怪特集号にも通じる「地方の再発見」という眼差しが感知できるだろう。

にわかに急成長した怪異をめぐる言説空間は、大正期にはより密接に文学場と結びつき、多様な幻想文学を生み出す母胎のひとつとなる。この問題については、また稿を改めて検討することとしたい。

注

- (1) 湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』（平成21・01、国書刊行会）参照。なお、以下の新聞記事の引用は基本的に同書に拠り、適宜現代語表記に改めた。
- (2) 明治期の怪談の位相については、一柳「怪談の近代」（平成26・07、「文学」）参照。
- (3) ジェームズと心霊研究については、ジャンネット・オッペンハイム著、和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭 ヴィクト

リア・エドワード朝時代の社会精神史』（平成04・01、工作舎）、伊藤邦武『ジェームズの多元的宇宙論』（平成21・02、岩波書店）など参照。

- (4) この点については、一柳『こっくりさん』と〈千里眼〉日本近代と心霊学』（平成06・08、講談社選書メチエ）、同『催眠術の日本近代』（平成09・11、青弓社）などで論じた。同書の復刻としては、一柳近藤瑞木編『幕末明治百物語』（平成21・07、国書刊行会）がある。
- (5) 詳しくは、一柳「幽霊は逆襲する―『百物語』における『神経』と幽霊」（『幕末明治百物語』所収）参照。
- (6) スミスと怪談については、荒俣宏監修『ゴードン・スミスの日本怪談集』（平成13・08、角川書店）参照。
- (7) 『故郷』という物語 都市空間の歴史学』（平成10・07、吉川弘文館）。
- (8) 千里眼事件に関するまとまった紹介としては、寺沢龍「透視も念写も事実である 福来友吉と千里眼事件」（平成16・01、草思社）などがある。
- (9) 『鉄道』と旅する身体の近代 民謡・伝説からデイスカパー・ジャパンへ』（平成23・10、青弓社）。
- (10) 例えば東『百物語の怪談史』（平成19・07、角川文庫）、同『遠野物語と怪談の時代』（平成22・08、角川選書）など。
- (11) （いちやなぎ・ひろたか／横浜国立大学）